## （第五段）火鼠の皮衣

右大臣*あへのみあらじは、たからゆたかに、*家ひろき人にてぞ、おはしける（右大臣安倍御主人は、財産が豊かで、一族が繁栄している人なのでいらっしゃいました）。 *「あへのみあらじ」は「全集」に従って「安倍御主人」の漢字表記を当てて置く。が、「全集」が是を実在の人物そのものの＜あべのみうし＞を正解としていることには、疑問が残る。阪倉篤義 校訂の岩波文庫「竹取物語」の流布本系本文には＜あべのみむらじ＞とあり、この人物設定が成立当時に於いて周知の実在人物を類型に引きつつも、敢えて少し名を変えて架空性を与えて普遍化を狙ったという可能性は、現代劇に於いても同様の事情があることから、十分に有り得ると思える。ただ、安倍御主人は実在の人物といっても相当に昔の人なので、今の読者にはその実体実感は無いから、漢字表記の視認性と架空属性は両立するかと思い、便宜する。 *「いへひろし」は＜一門一族が栄える。＞と古語辞典にある。

*そのとしきたりけるもろこしふねの王けいといふ人に（右大臣はかぐや姫の難題提示があった、その年にこの国に来て取引をした中国船の貿易商の王慶という人に）、「ひねずみのかわといふなる物、かひておこせよ」とて（「火鼠の皮というらしきものを、買って私に送ってくれ」と注文書を書いて）、つかふまつる人の中に、心たしかなる人をつかはす（従者の中で頼りになる者を、探索の渡航随行者として派遣します）。 *「そのとし」とは何時の事か。安倍御主人がかぐや姫に＜火鼠の皮衣＞を届けたのは、下文に「このたびはかならすあはせむ」と翁の発言文があることから、石作皇子と倉護皇子が失敗した後のことのようで、それもそれぞれが順を追って登場したかのような語り口なので、かぐや姫からの難題を受けた三年後のことと見るべきなのだろう。で、この「そのとし」はそれを遡る何年か前の年になりそうだが、それは必ずしも三年前の受注時であるとは限らない。が、だからといって、一年前や二年前と断じる根拠も示されていない。となると、「その」という言い方が、話者の意識としては、既に何かを語り示した＜時点＞を指すように思うので、やはり三年前にかぐや姫の難題提示があった年、と見る以外に本文に手掛かりは無さそうだ。が、少し読み進んでみても、王慶が＜火鼠の皮＞を調達するのに三年程掛かったようには見えないので断じ難いのだが、逆に明示は無いものの、王慶は三年もの間を苦労して＜火鼠の皮＞を探し出した、というように読むべきなのかも知れない。

小野の*草もりといふ人して、つかはさす（小野房守という人を、その随員の任に就かせます）。もていたりて、かの*つくしのもろこしといふ所にをる、わうけいにこがねとらす（房守は右大臣の手紙を持って任地に到着し、太宰府の中国人居留区という所に滞在している王慶

に費用の黄金を渡します）。王けい、この文をひろげて見て返事かく。いはく（王慶は右大臣の手紙を広げ見て返事を書きます。即ち、）、 *「くさもり」は「草」が漢字になっているので、写本自体が「草もり」と書かれていたのだろう。が、「全集」では是を「ふさもり」と仮名表記していて、訳文は＜小野の房守＞としてある。そして何と、当文に於いてもすぐ下には「をののふさもり」と書かれている。だから、私もこの人物を＜小野房守＞と言い換えて置くが、是が古本の安直さの証だとしたら、何ともザラつく気分にさせられる。 *「つくしのもろこしといふところ」は何処か。文字面が「筑紫の唐土といふ所」だとすれば、是は＜北九州の大陸という場所＞という言い方で、「北九州」を＜太宰府＞、「大陸」を＜中国政府＞の意味と取れば、具体意が見えてくる。例えば、太宰府にあった鴻臚館（こうろくわん）が＜接待所＞ではなく＜大使館＞だとしたら、是に当たるような気もするが、まぁ特定は気が引けるので、いくらか曖昧に＜中国人居留区＞とでも言って置く。なお、「全集」は此処の文意について、王慶は中国に帰っていて、房守は遣唐船で中国に派遣された、と解しているようだが、私は当古本本文を真じて読んで置く。とはいうものの、古本への信頼に根拠があるわけではないので、その本文を私がこのように恣意的に解釈するのは遊びにしては質が悪い気もするが、ただ伝承物語に絶対正解はなく、諸説を眺めて全体像を掴む以外に、話を語り継いできた人々の思いの厚みを受け止める方法は無いものと奮起したい。

「ひねずみのかわぎぬ、*このくにには なき物なり（火鼠の皮衣は我が国には無い物です）。名にはきけども、いまだ、めに見ぬものおほかり（名前は聞いていても、未だ目にしたことがない物は多くあります）。世にある物ならば、このくにへも、*まうできなまし（でも、世に普通にある物ならば、我が国にもそれは当然に運び込まれていましたことでしょう）。 *「このくに」は王慶が言う「我が国」の意味で＜中国＞のこと、のようだ。現代語の定義では「この国」という言い方は話者が現に居る場所を包括管理している国体という認識なので、王慶が日本に滞在しているなら＜「このくに」＝中国＞は変な言い方だが、国体認識が希薄な時代の古文の定義では「この」は＜此方の、我が方の＞という言い方が普通のようだ。 *「まうできなまし」の主語は何か。「まうでく（詣で来）」は＜「来る」の丁寧語＞と古語辞典にあるが、「来・来る」のは人とは限らず＜過程の進行を表わす＞とも古語辞典にある。となると、「なまし」は過去完了推量の言い方なので、「まうできなまし」は＜（事態が）もたらされていたはずだ→そうなっていて当然だ＞で、その「事態」とは＜火鼠の皮衣が中国に持ち込まれること＞であるのが素直な文脈だ。

いとかたきあきなひ物なりしかども（それは容易に取引出来る物ではなくても）、てんぢくに、もてわたりなば、*もし、長者の家々に、とぶらひ*もとめむに（インドに持ち運ばれていたなら、ひょっとしたら、資産家の家々に探し求められましょうに）。なき物ならば、つかひにそへ

て、かねを返したてまつらむ（其処にも無いものなら、使者にその経緯の手紙を添えて、お預りした資金と共にお返し申します）」といへり（ということでした）。 *「もし」は仮定文を示す論理副詞語で、現代語法では下に条件提示が個別例示されるのが普通だが、古語では「もし」自体で＜もしかすると＞と稀な場合の条件提示語法になる、ようだ。 *「もとめむ」の「む」は＜意志＞ではなく＜可能＞の助動詞だろう。

もろこしふねかへりにけり（中国船は、房守を連れて帰国しました）。*そののち、もろこしぶねきけり（それから三年の月日を経て、中国の貿易船が日本にやって来ました）。 *「そののち」はどれほどの期間の後なのか。話の辻褄をあわせるなら＜それから三年後＞だろうが、それにしては、あまりに素っ気ない言い方だ。いや、王慶の事情は主題ではないので省略されるのは変ではないが、三年という期間はそこそこ長く、それでも明示さえあれば三年が十年でも読者なりに腹づもりが出来るが、何も言わないで済むほどの短さではない、と私が此処でいくら意気んでも、無いものは無い、というのが現本文だ。だから言い切るのは些か躊躇されるものの、辻褄が合わないのはやはり気持ち悪いので、左様明示補語する。

をののふさもり、*まうできて（小野房守が帰国しまして）「*まうのぼる」といふ事を*ききて（上京するということを、早馬取次の手紙で聞き知った右大臣は遂に火鼠の皮衣を見つけ出したかと）、あゆみとうするむまを*もとめてはしらせむ、*むかへさせ給はむ時（房守に足の特に早い馬を使って急いで都へ向かうようにと、早馬取次の返信で急がせる指示をなさったこと、から）、むまにのりて、つくしより、ただ七日に、まうできたり（房守は早馬に乗って筑紫よりたったの七日で右大臣の許に参上しました）。ふみをみるにいはく（右大臣が、房守から手渡された王慶の手紙を読むと、文面には）、 *「詣で来」は「来る」の丁寧語のようだが、何処から何処へ移動したのか分からない。ただ、次に「まうのぼる」とあり、是は＜参上る（まゐのぼる、上京する）＞の音便と古語辞典にあるので、「まうでく」は＜中国から日本に帰国した＞と読むのが文脈に適うと思われる。それにしても此処へ来て、難文、もしかしたら拙文、が続いて非常に読み難い。 *「まうのぼる」は「まゐのぼる（参上る、参上する）」の音便、と古語辞典にある。主語は房守。 *「聞きて」は敬語遣いが無いが、「向かへさせ給はむ時」に繋がる構文と見て、主語は右大臣と読んで置く。また、この物語では敬語遣いは概して雑な印象だ。源氏物語の近江の君の例を思えば、身分社会は身分社会だったからこそ下層の人びとに教育は行き届かず、彼等に於いては敬語遣いが雑だったかの印象があり、ざっと民衆口伝された話なら敬語などの混同は、むしろ普通なのかもしれない。それでは非常に読み辛いのだが、そうでなくても古文は省語が多く、閉口するが、興味がある内は我慢する。 *「求めて走らせ」の主語は小野房守で、彼自身の意志は物語の進行説明上は無効だろうから、助動詞「む」は右大臣の意志とは即ち指示だか

ら、下に＜やう＞が省かれているのだろう。ところで、電話の無い当時、この上京の知らせを在京の右大臣に伝えたのも早馬だったはずだ。尤も、その早馬は馬も人も交代可能だ。親書であれば駅毎に配下の者を待機させていなければならないが、右大臣であれば配下の手配に事欠くことはないだろう。引継を繰り返して、手紙本体さえ早く届けば事足りる。例えば、それは＜早馬取次＞とも言えるだろう。が、房守は自身が使者本人なので、馬を駅毎に乗り換えるのは構わないとしても、王慶の手紙だけでなく本人も目的地へ到着して、詳しい事情を大臣に報告しないと役目が果たせない。という背景事情があるから、此処の文はわざわざ＜「あゆみとうするむま」＝特に足の早い馬＞を話題に取り上げているのだろう。したがって、本文には書かれていないが、その辺の背景事情も明示しないと現代人には是がとても不思議な文に見えてしまうのではないか。少なくも私にはとても変な文なので、これらの背景事情を明示補語する。 *「むかへさせたまはむとき」は敬語表現になっているので、右大臣が房守に＜（都へ）向かわせなさる時＞という言い方だ。で、この時の「時」だが、これも背景事情で「早馬を使え」という右大臣の指示自体が早馬取次で伝えられた、その＜時＞を指していて、下に＜によりて＞が省かれた緊迫表現、かと思う。だから、言い換えとしては＜（早馬の手紙で）上京を急げとの指示が与えられたので＞というのが分かり易い現代文なのだろう。

「ひねずみのかは、からうして、人をいだして、もとめてたてまつれり（火鼠の皮は、どうにか、人を各方面に出張させて、探し求めて、お送り申した物です）。いまの世にも、むかしのよにも、このかは、たはやすくなき物なりけり（今の世でも、昔の世でも、この毛皮は入手困難な物でした）。むかし、かしこきてんぢくのひじり、このくににわたりて、にしの山でらにおよび（昔、尊いインドの聖僧から、我が国に渡って、西の山寺に届いていて）、*おほやけに申〈し〉て（国宝となっていたので、政府に願い出て）、からうして、かいとりてたてまつる（ようやく買い取ってお送り申します）。 *「おほやけ」は＜唐政府＞だろうが、「西の山寺」は国の宝物庫だったのか。何も説明が無い。が、ともかくも火鼠の皮が国の管理物でないと話が繋がらないので、左様補語する。

「あたひのかねすくなし」と、こくしぞ、つかひに申〈し〉しかば（あなた様からお預りした資金では「値段が安すぎる」と宝物管理官が手前共の担当出張員に申しましたので）、王けい物くはへて買ひたり（この王慶が不足額を立て替えて買いました）。いま、かね五十両給ふべし（此処で、あと金五十両を頂かなくてはなりません）。ふねのかへらむにつけて、*だにをくれ（帰り船にも、買付品を積み込むので）、もしかね給はぬ物ならば、かはぎぬのしちを、返したべ（もし残金を頂けない場合は、皮衣本体をお返し下さい）」といへる事をみて（と書い

てあるのを見て）、 *「だにをくれ」が分からない。「南波校本」では此処の文意を＜早く欲しいが、せめてまあ唐船が帰唐する時にでも送って下さい。＞としてあるが、電子為替の無い時代に「早く欲しい」と言っても、代金は帰船で運ぶ以外に届かないだろうから、この解釈は疑問だ。また、「全集」ではこの部分の本文は「賜び送れ（たびおくれ）」となっていて、この分節の訳は＜船が帰るとき、その船に託してお送りください。＞としてある。「たぶ（給ぶ・賜ぶ）」は敬意の補助動詞で、下にも「かへしたべ」と語用されているので、「たびおくれ」は文意や文体に説得力がある表記にも見えるが、同じ文意や文体からなる文とするなら、此処の文は＜送り賜ふべし＞の方が分かり易い。で、せっかくこうして異文があるのだから、これを真じて別の可能性を探る。と、先ずは構文解釈だが、「だに」は名詞、「を」は格助詞、「くれ」は動詞「クル」の已然形、と仮定する。と、これは尊敬語文ではないので、船側の何らかの事情を言っている文になる。「だに」は「駄荷」の項目が古語辞典にあり＜駄馬につけた荷物＞とされているが、駄馬は近代語かも知れない。が、他に「だに」の名詞項目は辞典に無く、「たに」として＜虫のダニ＞や＜自家用や交易用にあてた布地・絹布＞があり、「布地」ならいくらか意味を成しそうだが、いずれも直ちに具体意が見える名詞は無い。となると、いずれチカラワザなので、それならやはり「駄荷」を引いて、これを王慶が謙遜して言う＜帰り船に積んだ買付品＞と見做す。と、「くる」は「繰る」で＜順送りする→荷造りする＞と解せば、「だにをくれ」は＜荷物をまとめるので＞という言い方になる。我ながら少し食傷気味のチカラワザながら、こう結論を得たので左様に解す。

「なにおぼす（何をお考えか）。いま、かねすこしにこそあなれ（不足額は、あと少しではないか）。かならずをくるべきにこそあなれ（必ず送るに決まっている）。うれしくして、*をこせたるかな（嬉しいことに、よく遣してきたものだ）」といひて、もろこしのかたにむかへて、ふしをがみ給〈ふ〉（と言って、右大臣は唐国の方に向かって、伏して拝みなさいます）。 *「をこす」は「遣す」以外の文意を取難い。だとしたら、標準仮名遣いは「おこす」であるらしい。

このかはぎぬいれたるはこを見れば、くさぐさのうるはしきるりを、*いろへてつくれり（この皮衣を入れてある箱を見れば、色々な美しい宝玉を飾り付けて造ってあります）。かはぎぬを見れば、*こんじやうの色なり（皮衣を見れば、青い毛皮でした）。毛の末には、こがねのひかり*をさきたり（毛の先は黄金の光を放っていました）。たからとみえ、うるはしき事、ならふべき物なし（いかにも貴重品と思われ、美しいこと例えようもありません）。ひにやけぬ事よりも、けうらなる事、ならびなし（火に焼けないこと以前に、その気品が抜群です）。 *「いろふ」は古語辞典に「彩ふ」で＜彩りを加える＞とある。 *「こんじゃう」は古語辞典に「紺青」で＜濃い藍色の顔料＞とある。よく分からないが、ブルー・フォックスみたいなものだろうか。 *「をさく」または「おさく」という動詞は無いので、これは格助詞

の「を」と動詞「さく」の構成だろう。で、「さく」は「離く・放く」で ＜放つ＞ という動詞がある。「放つ」は ＜遠ざける＞ だが、人を寄せ付けない神々しさみたいな形容かもしれない。

「むべ、かぐや姫は、このもしがり、あひし給けるにこそありけれ」との給〈ひ〉て（「なるほど、こんな美しいものだったので、かぐや姫は好ましがり愛しなさった、というわけだ」と大臣は仰って）、「あなかしこ」とて、はこに入〈れ〉給〈ひ〉て（「いや、これは貴重品だ」と言って、箱に仕舞いなさって）、*物のえだにつけて、御身のけさう、いといたうして、やがて、とまりなむものぞとおもひて（身支度も入念になさり、こうして所望の御品を持参する以上は、婿と認められて、今夜はそのまま姫の寝屋に泊まることになるものと思って）、うたよみぐして、もちていましたり（贈り物に添える歌を詠んで、その色紙を気の利いた枝に付けて、この火鼠の皮衣を持ってかぐや姫の家にいらっしゃいました）。そのうたは（その贈歌は）　*「物の枝に付けて」は「歌詠み具して」に掛かる説明で、「おおんみの化粧～泊まりなむものぞと思ひて」は挿入句という構文のようだ。語りなら、この部分の語調を変えれば普通に伝わる言い方かもしれないが、文字に書き留めた場合は非常に分かり難い文だ。思い切って、この部分は次節に移して言い換えて置く。なお、「全集」注には ＜「物」は、事物を具体的に示さない場合にいう。梅の枝とか、桜の枝とかはっきりいわないのである。平安時代の物語は、このような場合、はっきり書いて季節感を表現するのがふつうだから、『竹取物語』の特異性を知るべきである。『竹取物語』は全体的に季節の表現が少ない。＞とある。同意する素養は私には無いが、少なくも『源氏物語』との対比では、確かに肯ける。また、季節感が少ない点については、私も気になっていて、話者や受者の興味、また物語の主題設定などの成立に関わる要素を考える上で、何らかの足跡でありそうには見える。

（和歌 08）「かぎりなき おもひにやけぬ かはごろも たもとかはきて けふこそはきめ」

（和歌 08、「全集」流布本版）「*限りなき思火に焼けぬ皮衣、袂乾きて今日こそは着め」　*古本と流布本は同文。「思ひ」の「ひ」を「火」に掛ける詠み方は、旧仮名遣いならではのもので、だから現代文では使えない洒落だし、こういう一字拾いは全くの勢いモノで、理屈で楽しめるものでもない。が、この歌は、その恋の炎で全編の歌筋を通している。分かり難い言い方は「今日こそは着め」で、「全集」注にも「着め」の「め」は「む」の已然形とある。助動詞「む」は意志や傾向または妥当性・可能性を示す場合が多いが、一般的妥当性を相手に説く言い方は遠回しの要求や遠慮がちな促しになるようだ。歌筋は ＜是を持参する燃える私の炎にも焼けない火鼠の皮衣を晴れてお贈り致しますが、燃える思い火で炙ったので袂は乾いたから、さぞ着心地が良いはずなので、今日はぜひ着たら良いと思いますよ＞ あたりだろうか。歌意は、入手困難な火鼠の皮衣を燃える情熱で探し出して、苦労の涙も報わ

れて、やっと此処にお届けするのですから、どうぞこの真心をお分かり下さい、という売り込みで、だから抱かせろ、という言い寄りだ。

（換歌 08）「火に焼けず 着心地の良い この毛皮」

といひたりけり（と書いてありました）。家のかどに、もていたりてたてり（大臣はかぐや姫の家の門口にこの皮衣を持って到着し、従者をして来意を申し立てました）。*竹取いでてとりいれたり（養父が応対に出て、その品を受け取りました）。かぐや姫に見す（そして、かぐや姫に見せます）。かぐや姫、このかはぎぬを見ていはく（かぐや姫はこの皮衣を見て言います）、 *「竹取」とだけある。前段までは「竹取の翁」または「翁」と示されていた。いくらか粗略な語り口に聞こえるが、ただの略なのか、何か意味があるのか、全く分からない。言い換えでは「翁」まで言わないと落ち着かないので左様補語する。「竹取」だけでは、どうにも舌足らずな違和感があるが、是が平気で伝わっているというのは、とても不思議だ。

「うるはしきかはなめり（りっぱな毛皮のようです）。わきて、まことのかわならむとしらず（が、取り分けて、これが本物の毛皮とは分かりません）」

*竹取いでて、いはく（養父はかぐや姫の部屋から控えの前室に出て、妻に言うには）、 *「竹取いでて」とあるが、何処から何処に出て、誰に何を言うのか。「出づ」は中から外へ出るので、例えば部屋から廊下へ、または奥から玄関へ、と移ることを言う。となると、翁は次の言葉を室内のかぐや姫に言ったのではない。また、その内容からして、外（寝殿の縁側より外側で対屋や別室も含む）の大臣やその従者に言ったとも思えないから、女房や家人に言ったのだろうが、下文に＜女＝妻＞の同意内心文が示されるので、この場面の翁の対話者は妻らしい。であれば、翁はかぐや姫の部屋（母屋）から前室（廂間）に出た、のだろう。

「ともあれかくまれ、まづ、しやうじ入〈れ〉たてまつらむ（ともかくも、先ず大臣を、この控え室までは招き入れ申し上げよう）。よに見えぬかわのさまなれば、*「これを」とおもひ給はぬ（普通の様子ではない毛皮なので、姫は是を火鼠の皮衣とお思いになっていない）。人ないたくわびさせたてまつり給ぞ（が、大臣をあまり待たせて、不安にさせ申し上げなさるな）」といひて、よびすへたてまつり（と言って、大臣を前室に招き入れて席に着かせ申し上げました）。 *「これをとおもひたまはぬ」の主語はかぐや姫で、「これを」は下に＜火鼠の皮衣なり＞が省かれているのだろ

う。分かり難い。

「かくよびすへて、*このたびは、かならすあはせむ（大臣をこのように着座させたからは、今回は必ず結婚させたい）」と*いひて、*女の心にもおもひをり（と夫は言って、妻も同じ事を心に思っていました）。 *「このたび」ということは、石作皇子と倉護皇子の失敗の後に今回の安倍御主人の訪問があった、という話運びを示している、のだろう。 *「いひて」の主語は翁のようだ。下に「女の心にもおもひ」とあるので、発言者は翁だ。 *「女」は話の上での登場は少ないが、いつもかぐや姫の側で世話をしている「妻の女（めのおうな）」（第一段）以外には考えられない。

この翁は、かぐや姫のやもめなるを、なげきとしければ（この養父はかぐや姫が独身でいるのを悲嘆としていたので）、『よき人にあはせむ』とおもひはかれど、せちにいなといふことなれば、ことはりなり（『良い人と結婚させたい』と思慮するが、一切嫌だと拒むので、今度こそはと思うのも、無理はないのでした）。かぐや姫、翁にいはく（かぐや姫が養父に言うことには）、

「このかはぎぬは、火にやかむに、やけずはこそ、まこととおもひて、*人のみことにまけぬ（この毛皮を火で焼いて、焼けなければ本物と思って、大臣の御言葉に従います）。『*よになに物なれば、それをまことと、うたがひなくおもはむ』とのたまふ（『世にまたと無い見事な品なので、これは本物だと疑いなく判断できる』と大臣は仰います）。なをこれをやきて、心みむ」といふ（念のために、是を焼いて確かめましょう」といいます）。 *「人の御言」は次の文に示されるが、「まけぬ」が意味する対象は大臣が歌で迫った＜苦労して探し出したのだから、今日こそ抱かせろ＞をいう、のだろう。 *「よになにもの」は不明文なので、「全集」文に倣って「世に無き物」と解す。なお、「おもはむ」の「む」は可能意と解す。

翁、「これ、さもいはれたり」といひて（養父は「なるほど、それは尤もです」と言って）、大臣に、「かくなむ」といふ（大臣に「姫の申し分はこうです」と言います）。大臣、こたへていはく（大臣が答えて言うことには）、

「このかわは、もろこしにもなかりけるを、からうして、もとめたつねえたるなり（この毛皮は唐国にも無かったものを、やっとのことで、探し出して手に入れたものです）。なにのうたがひかあ

らむ（何の疑いがあろうか）。さは申すとも、はやく、やきてみ給へ」といへば（そうは申しても、それではっきりするなら、早く焼いて確かめてごらんなさい」と言って）、火の中にうちくべて、やかせ給ふに、めらめらとやけぬ（その毛皮を火の中に入れて焼かせなさると、メラメラと焼けてしまいました）。

「さればこそ、こと物のかわなり」といふ（「燃えたということは、偽物の毛皮なのだ」と養父は言います）。大臣、これを見給ひて、顔は、くさのはの色にてゐたまへり（大臣は是をご覧になって、顔は草の葉の色のように青ざめて座り込んでいらっしゃいました）。

かぐや姫は、「あなうれし」と、よろこびゐます（かぐや姫は奥座敷からこの様子を伺い「ああよかった」と喜んで居直します）。かのよみたまへりけるうたの返し、はこにいれて返す（大臣が贈歌なさっていた歌の返歌を空の箱に入れて返します）。

（和歌 09）「のこりなく もゆとしりせば かわごろも おもひのほかに おきて見ましを」

（和歌 09、「全集」流布本版）「*名残無く燃ゆと知りせば皮衣、思火の外に置きて見ましを」 *古本と流布本は、一節が「のこりなく」と「なごりなく」の違い。大意は同文。この返歌も、「思ひ」の「ひ」を「火」に掛けて詠んである。「火の外に置く」は＜毛皮を焼かずに済んだ＞という慰めのようでも、明らかにからかいの嘲笑。「思いの外に置く」は＜初めから問題外＞という皮肉。大臣を此処まで愚弄できるのかと、こっちがヒヤヒヤするほどの辛辣さだ。が、それも歌なればこその、洒落の頓知と許されるのか。それとも、超人たるかぐや姫であったればこその所業なのか。

（換歌 09）「この毛皮 火に焼けぬなら 着れたのに」

とぞありける（とのように詠まれていました）。されば、かへりいましにけり（偽物と分かれば致し方無く、大臣はお帰りになったのです）。

世の人々、「あへの大臣、火ねずみのかわぎぬもていまして（世間の人びとは、「安倍の大臣は火鼠の皮衣を持っていらっしゃったので）、かぐや姫に*すみたまふとな、*みにみますかりとな」などとふに（かぐや姫に通い婚なさるそうだな、皇子を出し抜くとは身分以上に見栄えた

そうだな」などと家人に問うと）、*ある人のいはく（ある女房が言うことに）、 *「すむ」は現代語と同じく＜居拠する＞だが、此処では目的格が「かぐや姫」と人になっており、また誤写かと疑ったが、古語辞典には「住む」の語用に＜男が女の所に長く通い続ける。ながく妻とする。＞という例が示されていて、此処でも左様に解して置く。 *「みにみますかり」は「身に見増すかり」で＜身分以上に見栄えしていた＞と読んで置く。「かり」は形容詞の活用語尾「く」に状態の助動詞「あり」が付いた言い方、らしい。 *「あるひと」は発言内容からして現場に居て内情を知る人のようなので＜女房＞と明示補語する。

「かわは、火にくべて、やきたりしかば、めらめらと、やけにしかば、かぐや姫、あひ給はずなりにき（毛皮は火中に入れて焼いてみたところ、メラメラと焼けてしまったので、かぐや姫は大臣と結婚なさいませんでした）」と*世中の人いひければ、これをききてぞ（と言ったので、是を聞いてから、世の中の人は）、とげなき事をば、『*あえなし』とぞいひける（目的の果たせなかったことを、アベの大臣が為したこの故事に因んで「アへなし（「敢え無し」の古語）」と言っているのです）。 *「よのなかのひと」は「是を聞きてぞ」に繋がらなければ文意が取れない。是は誤写と断じて語順を移す。 *「あえなし」は「あへなし（敢へ無し、張り合いが無い）」の換字だろうが、この「あへなし」は「全集」注に＜「安倍の大臣」の「あべ」を掛けた洒落。＞とあるように、肝心のオチなのだから、「あえなし」では意味を成さない。が、現代語の仮名遣いでは「あへなし」は「敢え無し」なので、無粋にも説明文を補語しなければならない。

## （第六段）龍の首の玉

おほとものみゆきの大納言は、我〈が〉家の人あるかぎり、めしあつめての給はく（大伴御行大納言は全ての家人を呼び集めて仰るには）、

「たつのくびに五色にひかる玉あむなり（竜の首に五色に光る玉があるということだ）。それもてたてまつりたらむ人には、ねがはむ事をかなえむ（それを取って献上した者には願い事を適えよう）」との給〈ふ〉（と仰います）。

おほせ事ををのこどもうけ給〈は〉りて申さく（家人たちは殿の仰せ言を承って申します）、

「おほせ事はいともたふとし（大変に有難い仰せです）。ただし、たはやすくそのたま、えとらじを（ですが、容易にはその玉、とても取れませんので）。人いはむや、たつのくびのたまを

ば、いかがとらむ（皆が云うには、竜の首の玉を、どうして取れようか）」と申〈す〉（と申します）。

大納言のたまふ（大納言は仰います）。「*天のつかひといはむ物を（竜は天の使いと言ってあるものを、妖怪ならずば恐るるに足りず）。いのちをすててもおのが君のおほせ事をば、かなへむとこそおもふべけれ（命を捨てても主君の命を適えようと思うべきだ）。 *「てんのつかひといはむものを」は、主語を＜人＞とする一般論の＜広くこう思われているのだから＞という説得で、目的語は＜竜＞であり、こういう物言いは下に＜恐るるに足りず＞が来る扇動の常套句だ。省語は補語する。ただ、此処で言う「天の使者」は普通なら畏れ多いから、それでも＜怖くない＞と言うためには、引き合いに＜不気味な物＝変化の物＝妖怪＞を持ち出して置いた。

このくにになき、天ぢくの、もろこしの物にもあらず（また、この国には無い、インドや中国の物というわけでもない）。このくにのうみ山より、たつはおりのぼる（この国の海や山から竜は出没する）。いかにおもひてか、*きんぢにかたき物をと申〈す〉べき（何を以って、貴公たちには難しいものと言えようか）」 *「きんぢ」は古語辞典に＜「君貴（きみむち）」の転。二人称の、おまえ・きみ・なんじ。＞とある。

をのこども申〈す〉やう（郎党どもが申すには）、「さらば、いかがはせん（それでは仕方ありません）。かたき事なりとも、おほせ事にしたがひて、もとめにまからむ（難しいことであっても、仰せ言に従って、探しに出掛けます）」と*申〈す〉に（と嫌々申すのを）、大納言*見すまゐて（大納言は見据えて）、 *「まうす」に修辞は無いが、本当に家来がこんなことを言ったのかと思うほど明らかに＜嫌々＞で、言い換えでは文意を立たせるためにその形容句を明示補語した。 *「見すまゐて」は「見澄ます（見定める、見透かす）」の連用形「見澄まし」＋「ゐる（居る、座している、静止している）」の連用形「ゐ」＋接続助詞「て」、の「見澄まし居て」のイ音省略と解す。文法的に示すと煩雑だが、むしろこの言い方は慣用形で、くだけた語調なのだろう。此処までの話も決して固くは無いが、この段は初めからドタバタ調で、滑稽譚や落語の語り口だ。

「なんぢが君のつかひと名をながしつる（おまえたちが何処の主君に仕える家来なのかは世間に名を知られている）。君のおほせ事をば、いかがそむくべき（主君の命に、どうして背けよう）」とのたま〈ひ〉て、龍の首の玉をとりに、いでしたてたまふ（と仰って、家来たちを、竜の首

の玉を取りに出発させなさいます）。

この人々*のりてくる物に、殿のうちの絹・綿・*銭どあるかぎりとりいでてそへてつかはす（この家来たちは不平気味なので、大納言は家にある限りの、衣服や寝具や現金などを倉から出して、旅費の足しに持たせてお遣りになります）。 *「のりてくるものに」の部分は「全集」文とはだいぶ異なる。あまりに違うので、むしろこのままで文意を考えてみる。が、「とののうちの」以下はほぼ同文であり、その部分については「全集」に同じく＜家にある衣類・寝具・現金などをあるだけ全て倉から出して旅費の足しに持たせてお遣りになる＞と解しておく。また、上文からの流れで「この人々」は＜家来たち＞に違いない。で、いよいよ「のりてくるものに」だが、この格助詞「に」は、抽象名詞「もの」が＜～のための物として＞と以下の物資の用途目的をいう言い方や、あるいは＜～という物なので＞とそれらを用意した理由や条件や場合を示す言い方になる、という構文要素と見る。で、「のりてくる」だが、これを動詞「のる」の連用形＋接続助詞「て」＋動詞「くる」の連体形、と構成分解する。ここで先に、「くるものに」の文意を＜来るものに→そういう傾向があるので＞という条件項と仮定する。となると、「のる」は多くの語意があるが、上文からの流れを汲めば、此処の「のる」は「罵る（悪口を言う。非難する。ののしる。）」が最も文意が通るように見える。即ち、「のりてくるものに」は＜非難する傾向があるので→不平を言いがちなので＞という言い方、となる。深呼吸もののチカラワザだが、是で押し切る。 *「ぜにど」の部分は「全集」文には「銭など」とされている。此処はあっさり「全集」に倣って「など」と読んで置く。

「この人どもの、かへりくるまて、*いもゐをして我は居らむ（この者共が帰ってくるまで謹慎生活をして私は暮らそう）。このたま*とりては、家にかへりくる（彼等がこの玉を取って家に帰ってくる、ように念じて）」との給はせけり（と仰せなのでした）。 *「いもゐ」は「いもひ（斎ひ、謹慎生活）」の換字らしい。 *「取りては」の「ては」は条件適合の場合の述語を導く係助詞で＜～という成果を見たら＞という言い方。なお、此処の文は「いもひ」の目的を説明していて、「いへにかへりくる」は下に＜べし＞が省かれている、と読んで置く。

おほせ事をうけたまはりて、おのおのまかりいでぬ（大納言の御命じを承って、各自出発しました）。「龍の首の玉とりえずは、かへりくな」とのたまへば（「竜の首の玉を手に入れない内は帰るな」と大納言が途方も無いことを仰るので）、いづちもいづちも、あしのむきたらむかたへいな〈む〉ず（誰もが、当ても無いので勝手気ままに、足の向いた方へ去っていきます）。

「かかるすき事をし給〈ふ〉」とそしりあへり（「こんな物好きをなさって」と家人たちは文句を言

い合っていました）。たまはせたるもの、おのおのわけつつとる（殿様が下された物資はめいめいが分け合って取ります）。あるいは、おのが家にこもりゐぬ（ある者は自分の家に籠もってしまいます）。あるいは、をのが行かまほしきところへ往ぬ（ある者は自分の都合で行きたい所へ出掛けてしまいます）。

「親君と申〈す〉とも、かくつきなきことを、おほせたまふこと（親や主君は敬うべきものと申しても、このような無茶を仰せになっては）」とばかりゆかぬ物ゆへ、大納言をそしりあへり（と事がはかどらないので、大納言を悪く言い合っていました）。

「かぐや姫すへむには、れいのやうにはみにくし（かぐや姫を妻に迎えるには、普段のような家構えでは見苦しい）」との給ひて、うるはしき屋をつくり給〈ひ〉て（と仰って、大納言はりっぱな建物を造りなさって）、うるしをぬり、まきえして（柱や床に漆を塗り、蒔絵を施して）、屋の上に、糸をそめて、色々にふかせ給ふ（屋根には糸を染めて垂らし付け色とりどりに覆い飾りなさいます）。うちのしつらひ、いふべくもあらず、あやをり物にえをかきて、間ごとにはりたり（室内の装飾はいうまでもなく豪華で、綾織物に絵を書いて、間仕切の垂幕として張りめぐらせてありました）。

もとの妻どもは〈かへし給ひて〉（それまでの側室たちは暇を出しなさって所払いし）、かぐや姫、かならずあらむまうけをして（かぐや姫を必ず迎えようと準備を進めて）、もとの北の方とは、うとくなりて（元々の正室とは疎遠になって）、ひとりあかしくらし給〈ふ〉（大納言は独り住いなさいます）。

つかはせし人どもは（探索に差し向けた家来たちは）、よるひるまち給〈ふ〉に、*としふるまで、おともせで（大納言が夜昼無く吉報をお待ちなのに、年末まで何らの音沙汰も無く）、心もとながりて、ただとねり二人、めしつぎとして（待ちきれずに、年が改まると、側近の二人だけを、命令を取り次がせる従者に連れ立って）、やつれ給〈ひ〉て、なにはのほとりに、むまにのりていまして、とひ給〈ふ〉こと（簡素な旅姿をなさって、難波のほとりに、馬に乗っていらっし

やって、舟方衆にお尋ねになるには）、　*「としふる」は「年旧る」で普通は＜何年も経つ。年を取る。＞という語用だが、「旧年（ふるとし）」は＜去年＞の他に＜まだ改まらない年の内を新年に対していう。＞と古語辞典にあるので、此処では＜年末＞と解す。また、この言い方で以下の文に＜年が改まると＞という場面転換が内包されるようだ。

「おほともの大納言殿の人や、ふねにのりて、龍ころして、そが首の玉とれり、とやききし（大伴大納言家の人が船に乗って、竜を殺してその首の玉を取った、という話を聞かなかったか）」ととはするに、ふな人こたへていはく（と従者をして尋ねさせると、舟方が答えて言うことには）

「*あやしき事かな」とわらひて（「大変な話ですね」と笑って）、「*もはら、*さるわざするふねもなし」と申〈す〉に（「此処には一隻も、そんな無茶をする船はありません」）、　*「あやし」は＜畏れ多い。奇怪だ。変だ。＞という形容詞だが、「ことかな」は呆れ口調に聞こえるから、此処では＜そりゃ大変なことですね＞くらいの言い方なのだろう。笑いは愛嬌ではなく、冷笑だ。　*「もはら」は現代語では「もっぱら（専ら、主に・特に）」として使われている語のようだが、現代語では否定語用はしないように思う。また、似た語に「もはや」があり、是は作用の終了や事態の結果を示すが、「や」と「ら」の違いは「や」が対象への関わりが近い主観表現で、「ら」は「らし」の推量語感で対象に遠い客観表現のように聞こえる。で、「もは」は「も」も「は」も強調語で＜それはもう＞くらいの語感だ。現代語で否定語用しない理由は分からないが、元々具体意の無い曖昧語なので客観認識が進む現代語では使い難い、または伝わり難い表現なのかもしれない。ともあれ、古語では「もはら」の否定文語用はあって＜まったく、ちっとも、いっさい＞という強調の副詞であるようだ。が、此処でも＜まったく～ない＞みたいな強調否定だと恣意性が強い表現で、その言い換え文では今一つ説得力に欠ける気がして、あえて＜一隻もない＞と具体表現にして置いた。いや、「まったく」にしても「一隻も」にしても、客観的な証言としての有効性に於いては、どうせ裏付が無い言い放しなので、大差は無いと思うが、やはり聞いた印象は違う。それだけに、語意の言い換えとしては正確さに欠ける気もするが、文意としては正確かとおもう。　*「さるわざ」は＜そういうこと＞と言い換えられるだろうが、舟方の語調としては＜そんなマネ＞くらいの強い否定が「もはら」に示されているので、その意を汲んで＜そんな無茶なマネ＞とまで言って置く。

「*おぢなき事する、ふな人にもあるかな（臆病なことを言う舟方であるものだ）。*えしらで、かくいふ（我が武威を何も知らずに、言っておる）」とおぼして（と大納言はお思いになって）、　*「おぢなし」は古語辞典に「をぢなし」として＜臆病だ。いくじなしだ。＞とある。ただ、「おづ（怖づ、恐れる・

こわがる）」は「を」ではなく「お」のようだ。また、形容語尾の「なし」は＜事物が無い・居ない＞を言う場合と、「なす（する・形成する）」の連用名詞の形容詞語用で＜そのようになっている＞を言う場合があり、此処では後者だろう。が、「おぢなきことをする」を＜臆病な事をする＞とは解せない。「臆病な事をする」という言い方は「臆病なマネをする」に同じで＜怖がって失敗する＞という意味であり、舟方は「失敗した」と言っているのではなく「誰もそんな恐ろしいことはしない」と言っているのだから、この「おぢなきこと」は＜臆病な言＞であり、「する」は＜言う＞だ。 *「得知らで」は何を知らないのか。こういう目的語省略は日常会話では頻繁に見受けられる。此処でも以下にその内容はすぐ示される。が、「えしらでかくいふ」を＜何も知らない言い草だ＞と言ってしまうと、非常に文意が分かり難い。大納言は吐き捨てるように舟方を非難したい気分があるのだろうが、話の分かり易さからすれば、対象を客体化して明示する表現が望ましい。

「わが弓のちからは、つよきを（儂の弓の力は強いのだぞ）。龍あらば、ころして、首の玉はとりてむ（竜が出て来たら射殺して、首の玉は取ってしまおう）。遅く来るやつばらをまたじ（仕事の遅い家来共などを待つまでもない）」との給〈ひ〉、*ふねにのりて、うみごとにありき給〈ふ〉に（と仰せになって、船に乗って浪速灘、播磨灘と次次の各海をお進みになって）、いと遠くて、つくしのかたのうみにこぎいでぬ（はるか遠く、筑紫の方の海に漕ぎ出しました）。*「ふねにのりて」はいやにあっさりした言い方だ。此処までの舟方の弁からすれば、大納言との同道など固辞するはずだ。相当な礼金を示したとか、権威を笠に脅し付けたとか、何か説明が無いと説得力に欠けるし、その遣り取り自体が面白い話になりそうだが、全体の組み立てが難しくなるのだろうか、全く語られていない。が、その部分を補語して言い換えるのは、造話になってしまうので、さすがに手が出ない。

いかがしけむ（すると、どうしたことか）、はやきかぜふきて、せかいくらがりて、ふねをふきもてありく（俄に強風が起こり、あたり一面暗くなって、船を翻弄します）。いづれのかたと見えず、ふねは、うみ中にまきいりぬべく、ふきまはして（行方分からず、船は渦潮の中に巻き込まれるように、風が吹き回り）、なみは、ふねにぞちりけつつ、まきいれ（波は船に砕け当たり、呑み込む高さにそびえ立ち）、*神はおちかかるやうにひらめく（神鳴りは今にも落ちそうに閃く）。 *「かみ」は「かみなり（雷・神鳴り）」。「おちかかる」は「落ち掛かる（落ちそうだ）」ではなく、「落ち被る」で＜上から覆い被る＞。でないと、「やう」が二重形容になってしまう。

かかるに、大納言はまどひて（すると大納言は困惑して）、「またかくわひしきめ見ず。いか

がすべき、いかならむとするぞ（未だかつて、これほど心細い目に遭ったことは無い。どうすればいい。どうなるのだ）」との給〈ふ〉に、かぢとりこたへて申〈す〉（と仰ると、船頭が答えて申します）。

「ここらふねにのりて、まかりありくに、まだかくわびしきめを見ず（長年船に乗って、色々と経験してきましたが、未だかつて、これほど大変な目に遭ったことがありません）。みふね、うみのそこに*いらずは。神おちかかりぬべし（この御船は海底に沈まないでは済みますまい。雷も落ちるでしょう）。もし、さいはゐに神のたすけあらば、*南海道にふかれおはしましぬべかるめり（万一、幸いに神の助けがあるなら、南の外国の海に吹き寄せられなさるでしょう）。 *「入らずは」は「全集」訳に＜（お船が海の底に）沈没しなければ＞とあり、下文を読点で続けた訳が＜、雷が落ちかかってくるにちがいありません。＞としてある。そして、注には＜「は」は本来「ば」であるが、打消の「ず」の後にくるときは「は」と清音になる。＞とある。同意できない。各文法語用を確認する前に、「ずは」を条件項とする構文では文意論理が変だ。雷は既に「おちかかるやうにひらめ」いているのであり、新たな条件で起こる事態ではない。それに何より、雷が落ちた場合でも船は沈む可能性が大きいのである。で、文法だが、この「入らず」は、未然形の＜沈まない場合＞をいうのではなく、終止形の＜沈まないでいること＞を指す。だから「は」は、仮定条件を示す接続助詞「ば」の音便ではなく、強調または切迫表現の係助詞「は」であり、下に＜難し＞が掻き消された絶叫文と読んで置く。 *「なんかい」は「全集」注に＜南のほうの海。日本から遠く離れてしまうのである。＞とある。従って、さらに＜外国の海＞と言って置く。

*うたたあるぬしのみともにつかふまつりて（忠告に耳を貸さない雇主のお供にお仕え申して）、*すずろなる死にをすべかめるかな（思いがけない死に方をするようですよ）」とかぢとり申〈す〉（と船頭が申します）。大納言、これをききての給はく（大納言は是を聞いて仰るには）、 *「うたた」は大辞林に＜（多く「うたたある」の形で）ある状態が普通でないことに心を動かされる意を表す。＞とあり、デジタル大辞泉には＜（「うたたあり」の形で）不快な感じをもたらすさま。嫌な気を起こさせるように。ひどく。＞とある。すると、「うたたあるぬし」は＜普通じゃない主人→非常識な雇主＞あたりになりそうだが、これは「舵取答へて申す」言葉であり、当の大納言に向けて、仮に直接ではないにせよ、狭い船上で「ぬし」と名指しして発言しているのだから、いくら生死に関わる状況とは言え、悪口にも程は有って＜非常識だ＝良識に欠ける＞という劣性指摘は言えないのだろう。尤も、大納言は家人たちからも「かかるすき事をし給ふ」などと誹られてはいたが、それらは陰口だった。しかし、このままでは出口が見えないので、「うたた」の語感を少し考える。で、是は全くの勘だが、「う」は＜ウッと息

詰まる抵抗感＞で、「た」は＜とある＞の短語で状態を示し、「たた」の重複はその状態の進行または継続を示す、のではないか。マ、思い付きだが、辞書の説明と此処での語用を前提に考えてのことなので、この線で進めれば、「うたたある」は＜他人の抵抗感に構わず自説を押し付けてくる＞みたいなことで、強引さも強烈だが、舟方は大納言の＜聞き分けの無さ＞に閉口しているように思う。やはり、船を出す前に舟方は拒んだのだろうし、事情を話して説得したのだろうし、無茶だと諫めたのだろう。にも関わらず、褒美の約束と、最後は権威で脅し付けて船頭の船を買い付けたのではないだろうか。断定に足る根拠はないが、一応そう読んで置く。 *「すずろなる」は＜思いがけない。不慮の。＞。「死に」は＜死に方＞の短らしい。

「ふねにのりては、かぢとりの申〈す〉事をこそ、たかき山とたのめ（船に乗ったら船頭の申すことが、高い山たる道しるべとして頼りなのに）、なとなくたのもしげなくは申〈す〉ぞ（その名にあたいせず、頼りないことを申すものだ）」と、つらつえをつきての給ふ（と頬杖をついて仰います）。

かぢとり申〈す〉（船頭は申します）、「神ならねば、なにわざをか、つかうまつらむ（神ならぬ私が、どんな天変を起こし申せましょう）。かぜふき、なみこそはげしけれども（風が強く、波が激しいとは言え）、神さへ、いただきにをちかかるやうなるは（神鳴りまで真上に落ちてくるようなのは）、たつをころさむ、ともとめ給へばあるなり（殿様が竜を殺そうと探しなさるので起こっていることなのです）。疾風も龍のふかするなり。はや神に*のり給へ（疾風も竜が吹かせているのです。早く、神に許しを乞いなされ）」といふ（と言います）。 *「のる」は「告る」で＜述べる。告げる。＞と古語辞典にある。「祝詞（のりと、神に願い申す言葉）」は＜「告言（のりごと）」の約＞とも古語辞典にあるので、この「告る」は＜神への祈り＞なのかもしれないが、文脈からすれば船頭は大納言の慢心を諫めて反省を迫っているのだから、大納言が神に申すべき事は＜懺悔の告白→許しを乞う＞だろう。

「*よき事なり」とて（「それが正しいことのようだ」と大納言は舟方の言葉に自分の誤りを認めて）、 *「よきことなり」は大納言が船頭の発言を評価した言い方ではあろうが、この「よし」は善悪の善や優劣の優ではなく正否の正で、大納言は舟方の発言を認めたと言うよりは、自分の誤りを認めたということが、この言葉の本質かと思う。だから、素直に言うなら＜げにうべし、我あやまてり＞あたりなのだが、体面上、一般論として正しいと評価するような言い方になっているのだろう。そこで、「よきことなり」は客観表現にして、「とて」に＜誤りに気付いた＞ことを補語して置く。

「*かぢとりの御神きこしめせ（航海安全の神様、お聞きください）。心をさなく、たつをころさむとおもひけり（私は考えが浅く、竜を殺そうと思っていました）。いまよりのちは、毛の末一すぢをだに、うごかしたてまつらじ（今後は、竜の毛の先の一筋でさえ、触れ申し致しません）」と*よびことばをはなちて（と誓願を発して）、立ち居、泣く泣くおがみ給ふ事、*千繰りばかり、申〈し〉給〈ふ〉*けにやあらむ（立って拝み、座って拝み、泣きながら拝むこと、千回ほど繰り返し、鎮守を願い申しなさる効験だろうか）、やうやう神なりやみぬ（次第に雷は鳴り止みました）。 *「舵取のおおんかみ」は船頭が船中の神棚に祀っている＜航海安全を願う海神＞なのだろう。 *「よびことば」は手元の辞書には項目が無い。が、大納言は神に呼びかける誓いの言葉を言っているのだから＜呼び言葉＞で良さそうに見える。 *「千繰り」は「ちくり」か「せんぐり」か、どちらにしても辞書に項目はない。が、意味は＜千回繰り返す＞で良いのだろう。また、「千」は厳密な数ではなく、多数の言い方かと思う。 *「け」は「験（げん。効験。祈りの効果の現れ。）」の音便と読んで置く。

やうやうすこしひかりて、風はなをはやくふく（だんだん空は少し明るくなったが、風はなお早く吹く）。かぢとりいはく（船頭が言うには）、

「さればよ。たつのしわざにこそありけれ（やはり嵐は竜の仕業だったのだ）。このふく風は、よきかたのかぜなり（今吹いている風は、良い風向きだ）。あしきかたのかぜにはあらず、よきかたにおもむきて、ふくなり（悪い風向きではないので、良い方向に向かって、船は吹き寄せられるだろう）」といへども、大納言、これをもききいれ給はず（と言うが、大納言は、すっかり怖気づいて、船頭が経験から言う朗報も信じなさいません）。

風二三日ふきて、ふきかへしよせたり（風は二、三日吹いて、船を元の海へ吹き返し寄せました）。そのはまをみれば、播磨の国、明石の浜なりけり（その浜を見れば、播磨の国の明石の浜なのでした）。大納言、「南海の浜にうちよせられたるにやあらむ」とおもひて、いきづきふし給へり（大納言は「南海の外国に打ち寄せられたのだろう」と思って、苦しそうに息をして、横になっていらっしゃいました）。

ふねにあるおのこども、*くににつけたれども（船に居た家来たちは、播磨国府へ大納言殿

の帰国の連絡を付けたけれども）、くにのつかさまうでとぶらふにも、えおきあがり給はで、ふなぞこにふし給へり（大納言は国司一行が見舞に訪ねてきても、起き上がることがお出来にならず、船底に寝ていらっしゃいました）。 *「くに」は、此処では最寄りの国府、即ち播磨国府を指すらしい。

松ばらに御むしろしきて、おろしたてまつる（国司は浜の松原の木陰に御むしろを敷いて、大納言を船から降ろし申し上げます）。そのときにぞ、「南海にはあらざりけり」とおもひて（その時になって、「此処は南の外国ではなかったのだ」と思って）、からうして、をきたまへるをみれば（やっと起き上がりなさった大納言の姿を見れば）、風いとおもき人にて御はらふくれ（熱病に重く掛かった人なので、御腹が膨れ）、こなたかなたの御目にはすももを二〈つ〉つけたるやうなり（御両目は腫れてスモモを二つ付けたようなのでした）。これを見て、くにのつかさも、みな*おほゑみたり（是を見て、表敬を終えた国司たちも、皆大笑いしていたのです）。 *「大笑む」は、病人本人を前では失礼だし、貴人の大納言に対しては、それこそ地方役人の首が掛かって、畏れ多い。だから、「これを見て」で、面会を終えた場面に移ったものと見做して置く。

*くににおほせ給〈ひ〉て、*手輿つくらせ給て（日本国へ帰り着いたと知った大納言は国元に命じなさって、寝たまま運べる御輿を造らせなさり）、*にようにより、担はれのぼりたまひて（うめきながら担がれ帰京なさって）、家に*いり給へるを、*いかでかきき給けむ（自邸にお入りになったが、それからは、以前の自分勝手に無理難題を押し付けなさった時とは打って変わって、家来たちを案じて、どうしているかお聞きになったようです）。 *「くに」と改めて目的語を明示するのは、上で示した＜播磨国府＞とは別の対象を示しているように見える。となると、この「くに」は「国元」で京都または播磨の荘園領地と思われるが、下に「のぼりたまふ」とあるので、京都の自邸に帰り着いた文意と取るべきだろう。 *「手輿（たごし・てごし）」は＜前後二人で、手で腰のあたりまで持ち上げて乗せる輿。＞と古語辞典にあるが、此処ではわざわざ「つくらせたまふ」のだから特注品で、寝たまま運べる担架だったに違いない。 *「により」は古語辞典に「によふ」で＜うめく。うなる。＞とある。 *「入りたまへるを」の「を」は「入りたまへる」ことを対象体に指し示す格助詞かと思ったが、敬語文が続いて下文も大納言の動作となるので、この「を」は時間経過を示す接続助詞と解して置く。 *「いかでかききたまひけむ」は、「全集」文では敬語遣いがなく「いかでか聞きけむ」と郎党が主語になっている。この文を大納言の主語で文意を通すには多くの補語を要すので、誤写の可能性は高い。が、一応は当本文を真じて

置く。

「たつのくびの玉を、えとらざりしかば難波にもえまいらざりし（竜の首の玉は取れませんので、船出はおろか、浪速湊にも出向いておりません）。たまのとりがたかりし事を、しり給にければなむ（しかし今は、殿も玉の取り難かったことを、お分かりのようなので）、かんだうあらじ、とてまいりつる（お怒りはないだろうと思って、帰参致しました）」と申〈す〉（と家来たちは申します）。大納言、おきゐての給はく（大納言は起き上がって家臣に仰るには）、

「なんぢら、よくもてこずなりぬ（おまえたちは、よくぞ玉を持って来なかった）。たつは、なるかみの類にこそありけれ（竜は神鳴りと同類のものなので）、それがたまをとらんとて、そこらの人々のがいせられなむとするなりけり（その玉を取ろうとして、多くの人びとが殺されてしまうというものなのだ）。

まして、たつをとらへたらましかば、またともせず、われはがいせられなまし（まして、竜を捕らえたりしようものなら、間を待たず、私は殺されていただろう）。よくとらへずなりける（よくぞ、捕らえずに居たものだ）。

かぐや姫といふ、おほぬす人のやつが人をころさむとするなりけり（竜の首の玉を取るなどというのは、かぐや姫という大盗人の賊が人を殺そうとして仕組んだ罠なのだった）。家のあたりをだに、いまは通らじ（私は、あの家の近くさえ、もう通らない）。おのこども、なありきそ（外回りの男たちも、近づくな）」

とて（と仰って、）、家にすこし、のこりたりける物を、たつのたまとらぬ物どもにたびつ（家に少し残っていた財産を、竜の玉を取らなかった家来たちに与えなさいました）。

これをききて、はなれ給〈ひ〉にし元の上、はらをきてわらひ給〈ひ〉ける（是を聞いて、殿の許を離れなさった元の正室は、腸が千切れるほどお笑いになりました）。いとをふかせてつくりし屋は、とびからすのすに、みなくひもていにけり（染め糸で屋根を覆って造った新居は、トンビやカラスが巣作りのために、みな咥えて持って行ってしまっていました）。

せかいの人のいひける（世間の人の言うことに）、「おほともの大納言は、たつのくびのたまや、とりておはしたる（大伴大納言は竜の首の玉を取っていらっしゃったのだろうか）」といひければ、ある人ありて（と誰かが尋ねると、内情を知る者がいて）、

「*いかなるもあらず（どうにも成りはしません）。みまなこ二〈つ〉に、すもものやうなるたまをそろへていましたる（玉と言っても、御両眼にスモモのような玉を揃えて腫らしていらっしゃいました）」といひければ（と言ったので）、 *「いかなるもあらず」は「全集」文には「いな、さもあらず」とある。この段の結びに差し掛かって、この辺はオチの付け方を左右する文なので、本文の違いは相当に悩ましい。そして、「いなさもあらず」の方が分かり易い言い方にも思うが、これを下の「世にあらぬこと」の前フリとするなら、「いかなるもあらず」の方が具体意が無い分だけ熟れた言い回しのような気がする。

『*あな、たべがた』といひけるよりぞ（それを聞いた者が「いや、そのスモモはとても食べられない」と言ったことから）、*よにあらぬ事をば（努力してもどうにもならない実現不可能なことを）、「*あなたへがた」といひはじめける（「いや、もう堪えられない」と言い始めたのです）。*「あなたべがた」は「全集」注に＜「あな」は感動詞。「たべがた」は「食べがたし」という形容詞の語幹。形容詞語幹で文を中止するのは一種の感動表現。＞とある。従うし、この語法は現代語でも語用する。 *「よにあらぬこと」の部分は「全集」文には「よにあはぬこと」とある。そして、その注に＜「世にあはぬこと」は、世間の常識からはずれたことの意。家来たちが、このようなことは実現不可能として実行しなかったこと。あるいは「親や主君でもふつごうな命令には従えない」といったことなどをうける。＞とある。此処に至っての本文違いは本当に困るが、私はこの講談のオチは＜理詰め＞ではなく＜ダジャレ＞かと思うので、当本文の「よにあらぬ」のままで文意を解したい。で、「世に在らぬこと」だが、これは＜かぐや姫の難題が常識外れだ＞とかいう説話講談に沿った言い方ではなく、単純に上文の「いかなるもあらず」を受けた＜実現不可能なこと＞そのものを言っている、かと思う。古本と流布本の両本文の全体の理屈は似ているので、これらの点は微妙な違いのようでも、話者が聞き手を面白がらせようとしている意図は、話運びによって別のことを示すことになる。 *「あなたべがた」は「全集」文に「あな、堪へがた（いや、とても堪えられない）」とある。是は「あなたべがた」では、例えば＜彼方部方＞としても文意不明なので、「全集」文を頼りたい。また、このオチは五段講談での安倍右大臣の「敢へなし」と同型で、二段オチのダメ押し効果のバカらしさだ。

## （第七段）燕の子安貝

中納言いそのかみまろたり（中納言石上麿足が）、家に*つかはるるおのこどものもとに

（自家の家政奉公人を前にして）、「*つばくらめのすくひたらばつけよ（当家内にツバメが巣を作ったら知らせよ）」との給〈ふ〉をうけ給はりて（と命じなさるのを受け賜って）、「なにのようにかあらむ（ツバメをどうしようというのだろう）」と申〈す〉（と家人たちは申します）。こたへ給〈ふ〉（中納言はお答えなさいます）。 *「つかはるる」は、「使ふ（使役させる）」の未然形「使は」＋受身の助動詞「る」の連体形「るる」、から成る語で＜使役させられている＝使われている＞という言い方。だが、仮に使用人が使用者に対して相当に弱い立場であったとしても、奴隷の強制労働とは違って、それなりに主従双方が納得した合意契約関係だろうから、此処で言う「使われている」が示す実態は＜奉公している＞ということなのだろう。であれば、これは「仕へまつる」と同じ意味に見えるが、こういう言い方を特にする理由は何かあるのか。あるとしたら、「家に使はるる」を正に＜自邸内の雑務に使われる＝家政を与る＞という意味で言っている、ということしか私には思い付かない。また同様に、「もとに」は場所を言っているかと思うが、他ならぬ自邸の家人に対してであれば、わざわざこういう言い方をする意図は何か。これらのことから思い当たるのは、中納言が自邸から離れた所に居るという舞台設定だ。中納言はいうまでもなく公人である。普段は御所に詰めて居て、その主だった家臣は政務や外交に携わる側近たちなのだろう。だから、特に＜ヒラの家政奉公人＞を此処では「おのこ（をのこ）ども」と示し、政務ではない内々の命令を彼等に対して、普通なら伝言で下知するところを、直接話し聞かせた、という場面と解し、左様に明示補語して置く。 *「ツバクラメ」はツバメ・ツバクラ・ツバクロ・燕。「巣くふ」は＜巣を作って住む＞。「食ふ」に＜咥える＞の語用があるので、巣作りで鳥がワラなどを咥え運ぶ姿を「巣食ふ」と言うのかもしれない。尤も、「巣くふ」の「くふ」は古語辞典に「構ふ」と漢字表記がある。ところで、この「巣くひたらば」だが、これは「家に使はるる男どものもとに」発せられた中納言の命なので、漫然と何処かに＜あれば＞ということではなく、この＜中納言邸内で見つけたら＞という意味に取って置く。尤も、実際の舞台は御所の大炊寮に移るようだが、その前フリとしても此処では先ず＜邸内に於いて＞との打診があったものと解したい。

「つばくらめのもちたる、こやすがいをとらむ（ツバメが持つという子安貝を取りたい）」との給〈ひ〉ければ、をのこどもこたへて申〈す〉（と仰れば、男衆は答えて申します）。

「つばくらめは*あまたころして見るだにも、*はかなき物なり（ツバメを食用に数多く殺してみた時にも、特に何もありませんでした）。 *「数多殺す」とは食用目的以外の行為が想像できない。人が無益な殺生をするかどうかは別として、殺生に多くの労力が要ることは確かなので、その意味では無用な殺生はしないはずだ。しかし、ツバメを食用にするとは、私には馴染みが無い。ただ、スズメを食用にするのは、私はしないが、話には聞くし、かつては盛んだったようにも聞いた。で、ツバメはスズメ目ツバメ科と分類されるらしく、どちらも人家近くに営巣する小鳥であり、いくらかの混同・混用は有り得るような気もする。とにかく、それ以外の解釈が出来ないので、左様補語

する。なお、「だに」は＜～でさえ、～ですら＞と否定強調語用の副助詞として説明されることが多いようだが、本義は＜～だった時に＞という実体験に基づく説得意を示す語なのだろう。　*「はかなし」は＜たよりない。むなしい。＞という抽象形容語用が多いと思うが、此処では＜特に目に付くものは何も無い＞という具体意と読んで置く。やはり食用として毛をむしって丸焼きしたにせよ、内蔵を調べる処理はしたようだ。このようなあっさりと書かれた一文が斯くも分かり難いのは、当時の生活様式と今日のそれとの違いが相当にある所為なのだろう。

ただし、子産む時なむ、*いかでかいだすらむ、はべる（ただし、子を産む時には、どうかすると、何か出すようでございます）」と申〈す〉（と申します）。「人見れば、うせぬなり」と申〈す〉（「しかし、人が見れば消えてしまうものなのです」と同じ者は申します）。また人の申〈す〉やう（また、別の者が言うには）、　*「いかでか」は＜どうしてなのか＞という疑問語用や＜どのようにしても～できない＞という反語語用の他に＜何とかあってほしい＞という願望語用がある、と古語辞典にある。此処では願望意だろうが、それは中納言の願望であって、家臣は殿の意向を慮って、殿が＜何とかあって欲しい＞とお思いなのだから、此処は＜場合によってはあるだろう＞とお答えするのが正しい追従と考えた。しかし、口から出任せで調子を合わせてみても、実際には見たことも無く、まして手に入れることなど思いも付かないので、「人見れば失せぬなり」とその取得困難を付け足した。しかし、「人見れば失せぬ」ものを、どうして「いだすらむ」と推量できるのか。量子力学や哲学論議ならぬ生活用語としては論理破綻である。が、欲に目が暗んだ中納言は、家臣が「無い」と白状した＜可能性＞を、万が一には「在る」と曲解した。ただ、こういう話は何処にでも在って、結果として瓢箪から駒が出ることもあるようだ。

「*おほゐづかさの、飯かしぐ*屋のむねに*つつのあなごとにつばくらめは巣をくい侍り（当家内ではございませんが、御所の大炊寮なら炊飯所の屋根組みに設けた湯気逃し口のそれぞれに、ツバメが巣を作っております）。　*「おほゐづかさ」は不明。だが、「飯炊ぐ（いひかしぐ）」と続くので、これは「大飯司（おほいひづかさ→おほひづかさ）」のことなのだろう。で、古語辞典には「大炊寮（おほひづかさ・おほひれう）」は＜宮内省に属し、諸国から運んでくる米や雑穀を納め入れ、これを各官庁に分配することをつかさどった役所。＞とある。大内裏図によると、中納言の勤務先が太政官官舎だとすれば、その東隣が宮内省聴で、その東隣が大炊寮となっている。「寮」は、現代語では組織に付属した建物のような語感だが、むしろ組織に属する機関のことを元々は指したらしい。どうやら、この段の話の基本舞台は御所のようで、此処までの話は経過説明の地語りと見るべきかもしれない。ともあれ、此処からは＜御所の大炊寮＞が舞台になるようなので、この舞台設定はしっかり明示補語する。　*「屋の棟（やのむね）」は「屋」が建物で「棟」が屋根組み。　*「つつのあな」は「筒の穴」かと思う。「筒」は今で言う排気ダクトで、当時は木製だったのだろうが、大人数の飯を炊くのに釜戸がいくつか在って湯気で建物が痛まないように逃し口があった、というのは、私には是と言って左様な建物構造の証左を提示しえないが、妥当性はありそう

だ。

それは、*まめならむをのこどもを、ゐてまかりて（つきましては、辛抱強い男衆を連れていきまして）、*あぐらをゆひあげて、うかがはせむにこそ、つばくらめ*〈子うまざらむ〉やは（足場を組んで、巣の様子を窺わせていれば、いつかツバメは子を産まずにいましょうか）。さてこそ取らしめ給はめ（その時に子安貝を取らせなさいませ）」と申す（と申します）。中納言よろこび給〈ひ〉て（中納言は、是を聞いて喜びなさって）　*「まめならむ」は＜忠義な→律儀な→辛抱強い＞と読んで置く。　*「あぐら」は＜足場＞らしい。高座、やぐら、などとの縁語だろうか。　*「子産まざらむ」は「窺はせむにこそ」を条件項として受けるから、「（つばくらめ、やは）子産まざらめ」という音韻の言い方になるんじゃないのかな。

「おかしき事にもあるかな。もとよりしらざりけり（それは実に興味深いことだ。大炊寮のツバメの巣のことは全く知らなかった）」と（として）「*けうあること申〈し〉たり（足場から見張るとは、実に良い考えを申したものだ）」との給〈ひ〉て（と中納言は仰って）、まめなるおのこども、廿人ばかりつかはして、*あななひにあげすへられたり（根気強い男衆の二十人ほどを差し向けて、足場に上げて待機させなさったのです）。　*「けう」は古語辞典に「孝」とある。が、「孝」は親への奉仕で、臣下が主君に尽くすべきは「忠（絶対服従）」であるらしく、此処には当たらないようにも見える。が、「孝行」を広く＜実のある奉仕＞と見做せるなら、この「けうあること」は＜実に役立つこと＞という意味になりそうだ。他に上手い解が無いので、是で行く。　*「あななひ」は古語辞典に＜高い所に登る足がかり。足場。＞とある。「あぐら」が全体の構造を言い、「あななひ」は個別の現場を言う、のだろうか。

殿よりつかひひまなくて、「こやすがいとりたるか」と、問はせたまふ（中納言は自邸から大炊寮に忙しく使いを遣って、「子安貝は取ったか」と問い聞かせなさいます）。

「つばくらめも、人のあまたのぼりゐたるに怖ぢて、のぼりこず（ツバメも人が大勢足場に上って見張っているのに怖がって、巣に寄り付きません）」かかるよしを申〈し〉たれば、中納言、これをききて（という報告を使いが申したので、中納言は是を聞いて）、

「いかがすべき」とおぼしあつかふに（「どうしたものか」と思い患いなさっていると）、かのつかさの官人、*くらつまろといふ翁申〈す〉やう（その大炊寮の管理官の庫之助という古参が申

すには）、　*「くらつまろ」は＜倉庫番＞みたいな言い方に聞こえるが、これの言い換えは私には「庫之助」が分かり易い。

「こやすがい*とらせ給はむ」とたばかり申さむとて、御まへにまいりたれば（「子安貝を取らせなさるなら」と計略を申し上げたいということで、お目通りを願って参ったので）、中納言、*ひたひをあはせてむかゐゐ給へり（中納言は相手が倉庫番ふぜいの者ながら、子安貝が得られるものならばと直の目通りを許し、額を付き合わせて相談していらっしゃったのです）。くらつまろが申〈す〉やう（庫之助が申すには）、　*「取らせ給はむ」の主語は中納言だが、助動詞「む」は中納言の意志というよりは、事態の客観認識での仮定意を示す語用で、下に来るべき格助詞「に」が「と」に置き換わって、官人の発言文と地文とが混同しているのだろう。　*「額を合はせて向かひ居給へり」は「全集」注に＜中納言のような身分の高い人は、ふつう、くらつまろ程度の人と直接話をしないのだが、目的のためにはそんなことをいっていられなかったのである。＞とある。なるほど、そういう落語調らしいので、それらしく補語する。

「このつばくらめの、こやすがいは、あしくたばかりてとらせ給ふなり（今の燕の子安貝の採り方は、悪い方法でなさっています）。さては、えとらせ給はじ（これでは、お採りになれますまい）。あななひにおどろおどろしく、廿人のひと、のぼりて侍れば、散れてこず（足場に勇み構えて、二十人もの人が登っていたのでは、ツバメは散り去って寄ってきません）。

せさせ給ふべきやうは（御指示なさるべき方法は）、みなこのあななひをこぼちて、人みなしりぞきて（この足場を全て取り払って、人もみな引き下がって）、まめならむ人ばかりを、*粗籠にのせすへて、綱をかまへて（辛抱強そうな者を、軽籠に乗せて控えさせて、他の者は引き綱を構えて）、とりの、子うまむあひだに（鳥が子を産もうとしている時に）、つなをつりあげさせて、ふとこやすがいやすらかにとらせ給ひてむ、よかるべき（綱を吊り上げさせて、素早く子安貝を取らせなさるのが、良いでしょう）」と申〈す〉（と申します）。中納言の給はく（中納言の仰るに）、　*「粗籠（あらこ）」は＜網目の粗いかご。＞と古語辞典にある。簡素というより軽量で素早く動かせることが狙いなのだろう。

「よき事なり」とて、すみやかにあななひこぼちて、人みなかへりぬ（「良い案だ」ということで、

さっそく足場を取り壊して、人はみな中納言邸に帰りました）。中納言、くらつまろにの給はく（中納言は庫之助に仰いますに）、

「つばくらめをば、いかならむ時にか、子産むとしりて、人をはあぐべき（ツバメというものは、どういう時に子を産むと知って、駕篭の人を引き上げれば良いのか）」との給〈ふ〉。くらつまろか申〈す〉やう（と仰います。庫之助が申すには）、

「つばくらめをは、子産まむとする時は、尾をさしあげて、七度めぐりてなむ、子は産みいだす（ツバメというものは、子を産もうとする時は、尾をピンと上げて、七回まわってから、子を産み出します）。さて、七度めぐらむ折、ひきあげてこやすがいはとらせたまへ（ですから、七回まわっている時に、駕篭を引き上げて、子安貝を取らせなさいませ）」と申〈す〉に（と申しますので）、

中納言よろこびて、よろづの人にも、*しら給はで、*みそかに寮にいまして（中納言は、庫之助のこの詳しい説明を聞いて、容易く子安貝が取れるものと嬉しくなって、あまり多くの人にも無用な事とお知らせなさらず、好奇の興味を抑えきれず、貴人にあるまじきことなれど、ひそかにご自身で大炊寮に出向きなさって）、をのこどもの中にまじりて、よるをひるになして、*とらしめ給ふ（男衆の中に混じって、夜も昼のように活発に、貝を取ろうとしなさいます）。

*「しらたまはで」は不明。「全集」文でこの部分は「知らせ給はで」とあり、分かり易いので此方に従う。が、「よろづの人にも知らせ給はず」は「よろこびて」の条件から直ちに導かれる事柄とは思えない。というか、くらつまろの説明を中納言がどうして喜んだのかは、実は明示されておらず、そのことを押さえれば自ずと「よろこびて」と「よろづの人にも知らせ給はず」は繋がるはずだ。で、その解は＜容易に子安貝を得られると中納言が判断した＞ということかと思う。安直に考えたから、大掛かりな体制を不要不急として煩がったのだろう。左様明示補語する。 *「みそかに」は＜ひそかに、人目を避けて＞だが、これは＜安直に考えた＞こととは別の要素だ。確かに、忍び歩きなら地味な格好の少人数で人目を避けるだろうし、此処でも、大げさにすればツバメが警戒して寄り付かないという事情はあるだろうが、この子安貝採りは何も極秘作戦というわけでもなく、作戦上からすれば、特に中納言だけが隠れて出入りしなければならない理由は無い。が、しかし、むしろ中納言自身が現場に参加する必要がそも無いという所がミソだ。やはり、中納言は特別に隠れて出入りしなければならなかった。なぜなら、地下の炊事場に出入りすべきではない貴人だからだ。にも関わらず、中納言は現場に参加したかった。それは、貝採りに好奇と好色が綯い交ぜの強烈な興味を中納言が抱いたからだ。これを

補語しないと文意を誤りかねない。 *「とらしめ」の助動詞「しむ」には＜使役意、尊敬意、謙譲意＞の語用があると古語辞典に説明がある。此処では「まじりて」という自発性が示されているので、尊敬意かと思うが、特に中納言の意志の尊重なのだろう。

くらつまろが申〈す〉を、いといたく*よろこび給〈ひ〉て、の給〈ふ〉（このように中納言は炊事場に出向いて、巣にツバメが戻っているのを見て、貝採りの手応えを実感なさったので、庫之助の助言を、それはたいそうお喜びになって、この庫之助を自邸に呼び寄せて対面して仰います）。 *「よろこびたまひて」は、まだ貝を得てもいないのに、つまり事態の進展もないのに、「くらつまろが申すを」を受けるのでは上文と文意が重複して、場面が掴めない。だから逆に是は、まだ貝を得てもいないのに、場面展開があったものと見做す他は無い。であれば、まだ目的は達成していないが、中納言は現場を踏んで、相当な手応えを得たので、喜びを新たにした、ということになるから、足場を取り外して巣の様子を見ると、散り去っていたツバメが巣に戻っていたのを見て、中納言は貝採りが実現しそうだと期待したのだろう、と推測できる。そこで中納言は気を良くして、くらつまろと面談して「の給ふ」のだろうが、そうなると、それは中納言が大炊寮に出向くのではなく、くらつまろを「御前」に呼び付けた場面と見るのが穏当だ。これらの事情は本文には明示は無いが、私の勝手な造話ではなく、文脈が示している文意だ、と私は信じたい。

「*ここにて、つかはるる人にも*なきに（其方はこの当家の奉公人でもないというのに）。ねがひをかなふることのうれしさ（其方の助言で、私の願いが叶うというのはうれしいことだ）」とのたまひて、御衣ぬぎて、かづけさせ給〈ひ〉て（と仰って、上着を脱いで庫之助に褒美としてお与えになったのだが）、さらば、ゆふさり、この寮にいまして見給〈ふ〉に（それから夕方になって、中納言はこの大炊寮にいらっしゃって巣の様子をご覧になると）、 *「ここ」は一人称で自分を＜この身。われ。＞として、「ここにて」を＜私の配下として＞と言ったのかもしれないが、この場面を中納言邸と見做して＜此処＞と読んでおく。 *「なきに」は下に＜よくぞ助くる＞などが省かれた言い切り。続く「願ひを叶ふる」の主語は中納言自身で、「なきに」を条件項として読点で是に続けるのは変だ。

*まことに、つばくらめ、巣つくり（本当に、巣を作っていたツバメは）、くらつまろ申〈す〉やう*をうけてめぐるに（庫之助が申すように尾を浮かせて回るので）、 *「まことに」は、「巣つくり」にではなく、「尾浮けて回る」に掛かると読む。ツバメが巣に戻っていたことは既に確認していた、というのが私の理解だ。だから、「巣つくり」は本文に於ける補語の挿入句と見做す。 *「をうけてめぐる」は「全集」文などに「尾浮けて回る」とある。従う。

粗籠に人をのせて、つりあげさせて（編み籠に人を乗せて、吊り上げさせて）、つばくらめの巣に、手をさし入〈れ〉させて、さぐるに（ツバメの巣に手を差し入れさせて探らせると）、「物もなし」と申〈す〉に（その男は「何もありません」と申すので）、中納言、「あしくさぐれば、なきなり」とはらだち給〈ひ〉て（中納言は「探し方が悪いから、見つからないのだ」と立腹なさって）、

「たれかは我ばかりおぼえむ」とて（「誰も私ほど真剣に考えていない」と思って）、「われのぼりて、さぐらむ」とのたまひて（「私自身が上って探す」と仰って）、籠にのりて、つられのぼりて、うかがいたまへるに（編み籠に乗って、吊られ上って、巣の様子を窺いなさると）、

つばくらめ、尾は*ささげて、いたくめぐるに（ツバメは尾を高く上げて盛んに回るので）、あはせて、手をささげてさぐり給〈ふ〉に（ツバメが腰を下ろすのに合わせて、手を伸ばして探りなさると）、手に*ひらめく物さはるときに（手に是だと閃く物が触れた時に）、 *「ささぐ（捧ぐ）」は＜捧げる。高く差し上げる。上にあげる。＞。 *「ひらめく」は＜雷が光る＞または＜旗が翻る＞という動詞と古語辞典にある。これでは「もの」の貝らしさの修辞にならない。で、この部分、「全集」文では「ひらめるもの」とあり、「ひらめる」は＜マ行四段活用の自動詞「平む」の已然形に助動詞「り」の連体形がついたもの。＞と注解がある。「平め（てあ）るもの」だから＜平らになっているもの＞ということらしい。丸い卵とは違う感触という意味だろうか。しかし、子安貝は平らなのだろうか。ところで、現代語の「閃く」には＜何かを不意に気付く・思い付く＞という語用があり、古語にはこの語用が無いと断じられるのだろうか。今日ほど多用されなかったとしても、雷の光る偶然性認識は昔も今も変わらないだろうから、この語感は現代の新しい感性とも思えない。この線で行く。

「我、物にぎりたり（よし、掴んだぞ）。いまは降ろしてよ（早く降ろせ）。*翁、し得たり（庫之助やったぞ、おかげで私は貝を得た）」とのたまふに（と仰せなので）、 *「おきなしえたり」の解釈は＜諸説ある＞と「全集」注にある。「翁」はクラツマロかマロタリ自身か。「翁」がクラツマロだとして、現場に居る当人への直接の呼び掛けか、内心での呼び掛けか。私は、「翁」はクラツマロだが、これは中納言の内心での呼び掛けで、「仕得たり」の主語は中納言だから、充実実感を示す言い方で、「今は降ろしてよ」と大声で命じたよりは、一段声を落としたものと解す。

あつまりて（居合わせた男衆がやたらと加勢に寄り集まって）、「とくおろさむ」とて、*つなを

ひきすぐして、つなたゆる（「早く降ろさねば」ということで、綱を一斉に手放し、その後で綱を掴み損なって、駕篭の落下を止められず）、すなはち、*やしまのかなへの上に、のけざまにおち給へり（中納言はたちまち、八島の鼎という大鍋に仰向けざまに落ちなさいました）。 *「綱を引き過ぐして綱絶ゆる」とはどういうことか。大勢で引き過ぎたので綱が切れた、というのは、この場面では納得し辛い。編籠は棟木か梁に渡した綱で吊り上げられている。「綱」とはその＜吊り綱＞だ。籠を上へ吊り上げる時は綱を下に引き下げる。籠を上に上げて置くには綱を留め木に咬ませて結び付けて置かなければならない。籠を地面に降ろす時は、籠は重力で下に落ちるので、綱は徐々に緩めることになる。だから、籠を降ろす時に＜綱を余計に引き過ぎる＞ということは有り得ない。尤も、揺れを抑えるための補助紐のようなものを、揺れと反対方向に少し「引く」ことはあるかもしれないが、それはあくまで補正であって、制御力は圧倒的に吊綱が支配する。となると、「引き過ぐす」の「引く」とは＜手前に寄せる＞のではなく手を引く→手放す＞で、「過ぐす」は＜放置する＞なので、故意ではないだろうが結果として＜綱を離し放す＞状態になった、ということかと思う。「あつまりて」の前フリは重要だ。籠を降ろすときは数人が息を合わせてゆっくりと綱を緩めなければいけないのに、船頭多くして船山に上るがごとく、皆が一斉に手を離した魔の時が出現したらしい。「絶ゆ」は＜切れる。無くなる。＞でもあるだろうが＜関係が途絶える→繋がりをなくす→手が届かない＞でもあるだろう。 *「やしま」は「八島・八州・八洲」で＜（多くの島の意）日本の国。＞と古語辞典にある。「かなへ」は「鼎」で＜《「金瓮(かなへ)」の意》現在の鍋・釜の用に当てた、古代中国の金属製の器。ふつう３本の脚がついている。王侯の祭器や礼器とされたことから、のち王位の象徴となった。＞とデジタル大辞泉にある。御所の炊事場にある「八州の鼎」はそういう名前の大釜なのだろうが、いかにも王族用の調理具ではありそうで、単なる不始末・失敗では済まされない不敬の罪にも当たりかねない大失態のようだ。どうもこの段は全体に一癖ありそうな言い回しになっていて、何か象徴的な物言いのようにも聞こえるので、後で見直すことになるかもしれない。

人々*あさましがりて、かかへたてまつれり（人々は驚き騒いで中納言を抱え起こし申し上げたましたが）、御目はしらめてふし給へり（白目を剥いて気を失っていらっしゃったので）、人は水をすくひいれたてまつるに、からうして、いき出給へるに（側近が水を掬い飲まして差し上げると、辛うじて生き返りなさったので）、またかなへの上より、てとる、あしとる、さげおろしたてまつる（それから、大鍋の上の中納言を、手取り足取りして、下げ降ろし申し上げます）。 *「あさましがる」の接尾語「がる」は現代語では＜殊更そのように振る舞う＞ような演出性を示す語用が多いが、此処ではほぼ＜（あさまし）くある＞という状態意のようだ。「あさまし」は＜意外で驚きだ＞という形容詞。

*からうして、「御心ちはいかがおぼしめさるる」ととへば、いきのしたに（「ご気分はいかがでご

ざいましょうか」と問えば、中納言は辛うじて息の下に）、 *「からうして」は「息の下に」に掛かる副詞と読む。こういう挿入語法は口語ではよくある語順だが、文字に置くと非常に紛らわしく、語順を移さずには居られない。

「物はすこしおぼゆれども、腰なむえうごかさぬ（意識は少しあるが、腰が動かない）。されども、こやすがいを、ふとにぎりもたれば、うれしくおぼゆるなり（しかし子安貝をうまく握り持っているので嬉しく思う）。まづ、*しそくさして、このかいの顔見む（先ず、手明かりを灯して、この貝の形を見たい）」と、御ぐしもたげて、御てをひろげ給へるに（と頭を起こして、手を広げなさると）、つばくらめの、*まりおきたるくそを、にぎり給へるなりけり（ツバメがしていたウンチを握っていらっしゃるのでした）。 *「しそく」は古語辞典に「紙燭・脂燭」で＜照明用具の一つ。松の木を長さ五十センチ、直径一センチぐらいの棒状にけずり、先端を焦がし、油を塗って火を付けるもの。もとの方を紙屋紙で巻く。もと、禁中などで席上に用いられた。＞とある。 *「まる」は＜大小便をする。＞というラ行四段活用の他動詞、と古語辞典にある。

それを見給〈ひ〉て、「あなかひなのわざや」と、の給けるよりぞ（それをご覧になって中納言が「ああ、貝ではなかったのか」と仰ったことから）、おもふにたがふことをば、「かひなし」とは、いひはじめける（期待はずれだったことを「甲斐無し」とのように言い始めたのです）。

「かいにもあらず」と見給ひけるに、御ここちも*たがひて（手にしたものが貝ではないとお分かりになると、御容体が急変したので）、*からびつのふたに、いれられ給〈ひ〉て、家に率てたてまつる（戸板代わりの唐櫃の蓋に入れられなさって、家にお連れ申し上げます）。くるまにのり給べくもあらず、*御こしは折れにけり（牛車にお乗りなさることも出来ず、腰が折れたのでは御輿にも乗れません）。 *「たがふ」には＜（容体が）かわる。通常でなくなる。＞という語用が古語辞典に例示されている。 *「唐櫃」は物入れだが、漆塗りの美しい調度で、贈答品の運搬にも使われ、その蓋は献上品を差し出すときの乗せ盆にしたらしい。普通なら動けない病人は戸板に乗せて運ぶところを、貴人なので唐櫃の蓋を使ったのだろう。こういう皮肉口調は、いかにもの滑稽譚だ。 *「御こし」は「みこし」ではなく「おおんこし」と読ませて、「腰」と「輿」を掛けて洒落ているのだろう。

中納言は、「かくわらはげたるわざして病むと、人にきかせじ」とし給〈ひ〉けれどそれをやまひに

て、いと弱くなりたまひにけり（中納言は「このような子供じみた失態で寝込んでいるとは、誰にも知らせまい」と家人に口止めなさっていたが、ご自身がそのことを気に病んで、非常に衰弱なさってしまいました）。

かいをもえとらずなりぬるよりも、人のききわたらむこと、日にそへておもひ給〈ひ〉ければ（貝を取れなかったことよりも、人聞きの悪さを日に日にお考えになったので）、ただにやみしぬるよりも、人聞きのはづかしくおぼえ給〈ふ〉なりけり（このまま死ぬとしても、ただの病死よりも、悪評の立つことが気掛かりでいらっしゃいました）。

これを、かぐや姫ききて、とぶらひにやるうた（このことをかぐや姫が聞いて、お見舞いに贈る歌が）

（和歌 10）「としをへて なみたちよらぬ すみよしの まつかひなしと きくはまことか」

（和歌 10、「全集」流布本版）「*年を経て浪立ち寄らぬ住之江の、待つ甲斐無しと聞くは真か」 *古本と流布本は、三節が「すみよしの」と「すみのえの」の違い。大意は同文。住之江は住吉大社の前浜で暴風の松並木があったのだろう。「浪」「浜松」「貝」と海尽くしの詠み筋なら「住之江」の方が語呂が良さそうだが、急所の「まつかひなし」が立つのは「住吉」のご利益を当てた方かもしれない。ただ、住吉大社がどこに縁付くのか私には分からない。石上氏との縁か、ツバメか、子安貝か、大炊寮か、八嶋の鼎か、唐櫃か。それら全てか。それとも、お宝は当然、海を渡ってくるものと海難除けを住吉さんに拝んでいたが、何年待っても船の知らせが無い、という皮肉だろうか。

（換歌 10）「浪立たず 待つ貝なしと 聞く浜辺」

とあるをよみてきかす（とあるのを女房が読み聞かせます）。いと弱き心ちに、かしらもたげて、人にかみをもたせて、くるしき心ちに、からうしてかき給ふ（中納言は非常に弱った体調ながら、頭を起こして、人に紙を持たせて、非力を推して、どうにか返歌をお書きになります）。

（和歌 11）「かひはなく ありける物を わひはてて しぬるいのちを すくひやはせぬ」

（和歌 11、「全集」流布本版）「*甲斐はかくありけるものを、詫び果てて死ぬる命を救

ひやはせぬ」 *古本と流布本は、一節が「かひはなく」と「かひはかく」が違っていて、これは大きく文意を異にする。古本版だと＜貝は無いので、このように見舞があっても、失意の中に死んで行く私は救われない＞。流布本版は＜貝が無かったのに、このように見舞頂いて冥利に思うが、目的を果たせず失意の中で死んで行く運命は変わらない＞。中納言の無念が出るのは古本版だが、達観風の流布本版の方が結びのオチとの相性は良さそうだ。

（換歌 11）「貝無しも 慰められる 甲斐がある」

とかき侍〈る〉ままに、たえいり給ぬ（こうお書きになったまま、中納言は亡くなってしまいました）。これをききて、かぐや姫、「すこし*あはれ」とおぼしける（中納言がこの返歌を辞世としたことを聞いて、かぐや姫は少し同情なさいました）。*それよりして、うれしきことをば、「かひあり」といひける（このように中納言がかぐや姫の見舞を「かひありける」と詠んだことから、嬉しいことを「甲斐あり」というのです）。 *「あはれ」は＜あなわれ（がこと）＞の短という説もあるようで、憐憫の情というよりは同情に近いのだろう。 *「それ」は中納言の返歌の第二節に「ありける」とあったことを指すのだろう。